

目 次

はしがき

本書の読み方

凡 例

序 章 犯罪の成立要件

1	犯罪論の課題	2
2	事例と問題の所在	2
3	行為といえるか	3
	犯罪は人間の行為である／絶対的強制下の行動ではないか	
4	どの構成要件に該当するか	6
	刑法的評価の第1は構成要件該当性／共犯は構成要件該当性の問題である／殺人罪か傷害致死罪か／構成要件の機能	
5	違法性は具備しているか	9
	正当防衛の要件／正当防衛の当てはめ／違法性とは何か	
6	有責性は具備しているか	12
	なぜ、有責性が犯罪の要素なのか／有責性についても超法規的阻却事由がある	
7	本事例のまとめ	14
	裁判所の判断／起訴する必要があったのか	
8	段階的に捉える犯罪論の意味	15

第1部 構成要件該当性

第1章 不作為犯

1	構成要件の全体像	19
---	----------	----

犯罪類型は刑法上の分類の成果／構成要件の要素と論点

2	作為犯と不作為犯	21
	不真正不作為犯の位置づけ／不真正不作為犯の問題点	
3	不真正不作為犯の成立要件	23
	不真正不作為犯の成立要件／作為義務／作為可能性／違法性の同価値性	
4	ひき逃げ犯罪の分類	26
5	法は家庭に入る	28
6	不作為の共同正犯	29
	共同作業上の不作為／主観面にずれがある不作為の共同正犯	
7	1つの条文にすべてが含まれる場合	31

第2章 因果関係

1	因果関係の有無で構成要件が定まる	34
	誰にどの範囲で責任を問うのか／さまざまな場面で問題となる因果関係	
2	因果関係が問題となる場合	35
3	条件関係	36
	条件関係とは何か／条件説でよいのか／条件関係にも難しいものがある／因果関係の断絶	
4	相当因果関係説	40
	相当性とは何か／相当性の判断基準／将来予測基準／折衷説の根拠	
5	因果関係の錯誤	44
6	簡単な答案例	45

第3章 故意犯

1	故意犯の位置づけ	48
	故意は構成要件上の問題／故意犯は個数が大切／行為者の故意と結果に違いがある場合	
2	故意犯と過失犯の区別	49
3	刑法上の錯誤	51
	事実の錯誤は故意の範囲を見定めるためのもの／犯罪の成立要件に関する錯誤／犯罪の成立要件外の錯誤／事実の錯誤と法律の錯誤の区別	

4 具体的事実の錯誤	53
錯誤の形態／未必の故意ある対象者は、錯誤の問題ではない／法定的符合説と具体的符合説	
5 抽象的事実の錯誤	58
抽象的符合説の根拠／抽象的事実の錯誤で故意犯が認められる場合	

第4章 過失犯

1 過失犯の課題	63
例外的な処罰原則／危険社会における過失犯	
2 過失犯としての処罰	64
過失犯の構成要件／故意犯との区別／過失犯の種類／結果の加重犯は過失犯ではない	
3 過失犯の構造	68
過失犯の要素／森永ドライミルク砒素中毒事件を手がかりに／予見可能性と結果回避措置の関係	
4 過失犯の成立要件	71
過失犯の意義／結果回避措置の根拠	
5 信頼の原則	72
許された危険の法理／信頼の原則を拡大すべきではない	
6 21世紀刑法学的作用	74

第5章 未遂犯

1 未遂犯は構成要件の拡張形式	77
ピストルを撃ってけがをさせたら傷害罪？／未遂犯は危険犯／犯罪の遂行段階	
2 既遂の時期	79
窃盗罪の既遂時期／早すぎた結果の発生	
3 未遂犯（障害未遂）	81
未遂の種類を区別する意味／未遂犯の要件／未遂犯の処罰	
4 不能犯	85
不能犯の意義／具体的危険説	

5 中止犯 87

中止犯は構成要件か／刑法は、犯行中の行為者にも働きかけ得る／中止犯の立法理由／自己の意思による中止行為／結果の発生を阻止すること／中止犯の効果／中止犯と共同正犯

第6章 共 犯

1 共犯関係が構成要件を明らかにする 94

共同正犯か無罪か／単独犯か共同正犯か

2 共犯と単独犯 96

共犯の意義と種類／共同正犯・教唆犯・幫助犯の基礎的な区別／間接正犯／同時犯／犯罪の競合

3 共同正犯 100

共同正犯の要件／共謀共同正犯／承継的共同正犯／過失犯の共同正犯／予備罪の共同正犯／共同正犯と違法性阻却事由

4 教唆犯・幫助犯 109

狭義の共犯の処罰根拠／教唆犯／幫助犯

5 身分犯と共犯 115

身分犯は構成要件を明らかにする／身分犯とは／65条1項の解釈／65条2項の解釈

6 共犯と他の論点 118

共犯は他のすべての論点に関わる／共犯と錯誤／共犯からの離脱

7 構成要件該当性のまとめ 121

第II部 違法性

第7章 正当防衛・緊急避難

1 違法性阻却事由 125

違法性阻却の意味／違法性阻却事由の全貌／違法性と有責性

2 違法性の本質 127

結果無価値論と行為無価値論／行為無価値論の論拠

3 正当防衛 130

正当防衛の意義／正当防衛の要件／過剰防衛／正当防衛と共同正犯	
4 緊急避難	135
緊急避難の意義／法的性格／緊急避難の要件／過剰避難	
5 法令行為・正当行為	139
刑法35条の趣旨／法令行為／正当行為／労働争議行為	
6 公共目的のための名誉毀損的行為	141
230条の2の立法の趣旨／免責の法的性格／真実性の証明ができなかったとき	

第8章 超法規的違法性阻却事由

1 違法性は実質的に判断する	144
実質的違法性論／超法規的違法性阻却事由／違法論が構成要件に影響する	
2 自救行為	146
限定的な許容／判例	
3 被害者の承諾	147
違法性が阻却される場合とされない場合／有効な承諾／同意傷害	
4 安楽死・尊厳死	148
積極的安楽死／安楽死に関する2つの判決／尊厳死	
5 義務の衝突	150
6 違法性阻却事由の錯誤	150
問題の所在／誤想防衛／誤想過剰防衛	
7 違法性阻却事由の主張は、どの段階で行うか	152

第III部 有責性

第9章 責任能力・刑事未成年

1 有責性の本質	157
有責性とは何か／責任能力／違法性と有責性	
2 責任と制裁	158
責任と制裁の区別／刑罰は目標ではない	

3	心神喪失	159
	心神喪失／精神の病気ということ／心神耗弱	
4	刑事未成年	160
	14歳未満は犯罪にならない／非行少年に対する処遇	
5	原因において自由な行為	162
	行為と責任能力の同時存在の原則／問題の検討	
6	心神喪失者等医療観察法	163

第10章 期待可能性・違法性の意識

1	超法規的有責性阻却事由	167
2	法律の錯誤	167
	法律の錯誤とは／相当の理由があれば	
3	法律の誤解	169
	あてはめの錯誤／法律的事実の錯誤	
4	違法性の意識の欠如	170
	超法規的有責性阻却事由の1つ／事例の検討／違法性の意識の可能性／相当の理由	
5	故意説と責任説	174
6	期待可能性の思想	175
	暴れ馬事件／規範的責任論／実定法の例／期待可能性の判断基準／期待可能性に関する判例／判例と立法	

第IV部 刑法学の基礎

第11章 罪刑法定主義・責任主義

1	犯罪と刑罰	185
	具体的法理の背景にある根本原則／刑法の意義／刑法の役割／刑法の立法根拠	
2	罪刑法定主義	191
	誰に宛てたどんな原則か／認められる根拠／具体的展開／刑法6条との関係	
3	責任主義	196

責任なければ犯罪なし／責任主義の2つの面／具体的展開

第12章 刑罰の内容

1 刑罰の内容と本質	201
刑罰の種類／刑罰の害悪性／刑罰の本質	
2 刑罰を数値で捉える	203
犯罪認知件数と刑罰適用数／数値でみる刑事司法のプロセス	
3 懲役刑の内容	205
処遇に関する原則／作業／矯正指導／受刑者の釈放等に関する情報の提供／ 食事の支給／民間協力／規律・秩序の維持／不服申立制度／PFI刑務所	
4 刑罰が克服すべき課題	208
国民の自覚の問題／刑罰に関する検討課題／社会的弱者が刑事司法過程の中 で割合として多くなる	
5 更生刑罰論	212
応報刑論と教育刑論／希望がなければ刑罰とはいえない	

第13章 罪数

1 罪数より前の問題	216
罪数が問われる理由／行為の個数／一罪か二罪以上か（構成要件の個数）／ 包括的一罪／法条競合	
2 実質的数罪	218
観念的競合／牽連犯／「最も重い刑による」／併合罪	
3 不可罰的事後行為	221
不可罰的事前行為／不可罰的事後行為	
4 併合罪と量刑判断	222

第14章 刑の執行

1 刑の適用	225
刑の適用の多様性／法定刑・処断刑・宣告刑／刑の加重・減輕	
2 場所的適用範囲	227
犯罪成立要件と場所的適用範囲／場所的適用範囲についての原則	

3 刑の執行 228

刑の執行／刑の執行以外の法的効果／仮釈放／さまざまな猶予制度

4 刑の消滅 231

刑の消滅／恩赦

用語集

事項索引

判例索引